



フリーライター 早田虔太郎

ふとしたきっかけで物流センターで働くことになった元・物流業界紙記者。駆け出し時代には、取材で毎日のように物流センターを訪れていた。しかし、記事を書くのと実際に働くのとでは、天と地ほどの違いがある。地道な物流業務を底辺で支える人たちと一緒に額に汗して働いた筆者が現場での体験をレポートする。

第1回

ベテラン女性ピッカーに睨まれる

カネに困ってピッカーに

すべては金に窮したことから始まった。

物流業界紙の記者として働いたあと、締め切りに追われる日々嫌気がさして旅にでた。しかし、そのうちに蓄えも底をついた。次の仕事が見つかるまでの間、いくらかなりとも金を稼ぐ必要に迫られた。昨年二月のことだった。

私が住んでいるのは東京から一時間ほど離れた近郊の新興住宅地。東京から電車に乗ると、途中で工場や物流センターがひしめく一帯を通りすぎて私の住む町へと辿り着く。

物流センターは年末の繁忙期で人手が不足しているはずである。簡単な構内作業なら、はじめたいときに働きはじめて、辞めたいときに辞めることができそうだった。

アルバイト情報誌をめくると、案の定、物流企業の求人広告が並んでいた。普段よりも数が多い。その中から「だれでもできる軽作業、時給八五〇円」を選ぶことにした。自宅から二〇分程度通えるのが魅力だった。

面接は十一月中旬。数日前までの季節はずれの陽気とは違って変わって冷え込みの厳しい朝だった。最寄りの駅から送迎バスに乗ると一〇分ほどで物流センターに着いた。

早速、事務所で面接を受けた。面接というより人事担当者が説明するのを聞いているだけだった。それによると、この物流センターでは荷主である通販会社から構内作業および客先までの配送を一貫して請け負っている、という。私は「今流行りの3PL事業だな」と

思いながらも黙って聞いていた。

「勤務時間は八時から五時でいいですか」

「はい」

「早田さんはいつから働けますか」

「明日からでも働けます!!」

「今週は金曜がアルバイトのオリエンテーションですから、金曜からのスタートにしましょう」

こうして、あっさり採用が決まった。ただし、最初の二カ月は見習い期間。契約を更新するかどうかは、その後の実績によるのだという。アルバイトとはいえ甘くはない。

面接を終え、送迎バスで駅まで戻ってきたとき、ふと思いついた。物流センターでの体験を記事にして売れないものだろうか。そうすれば、バイト代に加えて原稿料も入る。かくして、今回の連載が始まることになった。

時給八五〇円の「働きアリ」

十一月某日。アルバイトの初日である。

現場担当者の一人であるNさんから全体の作業の流れを説明してもらう。私と一緒に説明を受けるのは自転車でも通える距離に住んでいるという大学四年生のA君。平日は授業があるので土日だけ働くつもりなのだが、この日はオリエンテーションのために授業を休んだという。

この物流センターには、約二〇〇人がアルバイトとして登録していて、毎日一〇〇人ほどが働いている。男女の割合は四対六。年齢は二〇代から五〇代まで幅広い。アルバイト

トの唯一の共通点は、センターの近隣に住んでいるという点だけのようだ。

Nさんの説明によると、ここは二階建ての物流センターで、一階が荷受けと出荷に使われており、二階には商品を並べた棚が置かれている。商品在庫は五〇万点で、繁忙期にあたる十一月、十二月には毎日五万点の入出荷がある。アルバイトの作業は、荷受け、検品、棚入れ、ピッキング、梱包、出荷 など、細かくわけると二〇工程近くになる。

Nさんは説明を早々に切り上げると、軽い口調でこう言った。

「まずはピッキングからやってみましょう。ここでは一時間に一五〇個ピッキングするのが



アルバイト情報誌には構内作業から宅配ドライバー、引っ越し補助まで物流企業によるさまざまな募集広告が並ぶ

目標です。できるだけ早く達成できるように頑張ってください」

そして、その日は終日ピッキングだった。翌日も翌週もひたすらピッキング。十二月に入ってから、やったのはピッキングだけ。見習い期間中はおそらくピッキングしかやらせてもらえないことに気がつくのに、たいして時間はかからなかった。

Nさんの後についてピッキングエリアに向かった。六〇列の棚が並んだピッキングエリアでは、約三〇人のアルバイトが黙々とピッキング作業に打ち込んでいた。そこには、アルバイトにありがちな気怠い雰囲気は微塵もなかった。笑い声や話し声も聞こえてこない。ピンと張りつめた空気の中で、それぞれがピッキングカートを押しながら脇目もふらずに棚と棚の間を行き来していた。その姿は、小学校の夏休みの理科の宿題で観察した「働きアリ」そっくりだった。

私はその光景に不意を打たれた。これまでさまざまなアルバイトを経験してきたが、これほど真剣にアルバイトが働いている職場を見たことがなかった。時給はたったの八五〇円だ。何が彼らをごまかして駆りたてるのか。目の前の光景に気圧（けお）されながらも私は、自らも「働きアリ」の一員となるべくピッキングを開始した。

ピッキングのコツとは

ピッキングエリアでは、まずリストを受けとる。リストに書いてあるのは、商品名と商品

番号、ピッキングする個数。それに通路の番号、棚の番号、棚の何段目に商品が置かれているのかが書いてある。一枚のリストには、一〇〇個ほどの商品名が並ぶ。

次に、作業をはじめの前に、据え付けのコンピュータ端末に、バッチ番号、名前、パスワードを入力する。作業が終わると、同じ

ピッキングリスト

1	22・31・え	2個
2	22・78・あ	1個
3	23・82・う	3個
4	23・90・え	1個
・	×××××	1個
・	×××××	1個

三つの項目をもう一度入力する。

バッチ処理されたリストには、商品が一番の通路から六〇番の通路までピッキングしやすい順序に並べられている。各通路には間仕切りで仕切られた二〇〇ほどの棚があり、各棚は五段にわかれていて、【あ】から【お】までの平仮名がふつてある。仕切りの中には商品の大きさによって、一種類の商品が入っていることもあれば、何種類かの商品が入っていることもある。

そのリストの指示通りピッキングしてカートに乗せていけばいい。単純作業である。

最初は、通路22の棚31の【え】の段から、商

品を二個取ってこい。次は、同じ通路22の棚78の【あ】の段から一個取ってこい、という意味だ。

初心者ピッカーにありがちな失敗は、リストに書いてある情報をできるだけ多く記憶しようとする事だ。一行に書いてある情報は五項目である。それくらい記憶するのはわけがない、と高をくくるのだ。

リストに従って最初の商品を二個ピッキングした後で私は、次の商品を探した。しかし、目指す棚の前に立つても商品が見つからない。もう一度リストを見ると、【78】の棚を歩き過ぎて【87】の棚まで来ていることに気づいた。「ここ間違えないぞ」と意気込むが、今度も商品が見あたらない。リストを見ると、確かに【82・う】で間違いない。もう一度リストを見ると、【通路23】ではなく【通路22】にいる自分を発見した。

どうも、リストをにらみつけて少し歩いているうちに数字が頭からこぼれ落ちるようである。それとも、これは私の記憶力の問題だろうか。数日経って気がついた。大切なのは、欲張って全部覚えようとしないうことである。

まずは最初の三つの数字【22・31・え】、【22・78・あ】だけに集中することにした。場所を確定してから、もう一度リストを見て商品名と個数を確認する方が、時間のロスがなくなるからだ。

生まれてはじめてのピッキングは、正しい場所を探すのにもたついたため、思った以上に時間がかった。やっとの思いで作業を終え

て、端末に名前とパスワードを入力した。すると、こんな表示が表われた。

作業スピードは合格ラインの三分の一

「今回のスピードは、四八〇ノ時間です。目標達成まであと一〇二ノです」

一時間で四八個のピッキングということは一〇〇個のピッキングに二時間以上かかったことになる。確かに遅い。そしてコンピュータの画面は、今の三倍以上のスピードでピッキングせよ、と命令しているのだ。ようやくピッキングを終えて一息ついたところに、コンピュータから「ダメ出し」されたのだ。

一瞬、啞然となった。そして次の瞬間、怒りがこみあげてきた。

「そんなことができるわけないだろう」と言って、カートをひっくり返したい衝動をやつとのことで抑えた。

ピッキングが終わる度に出てくるこの表示を終日見るうちに、物流記者時代に書いた記事のことを思い出した。五、六年前のことで、ようやく3PLという概念が日本に広がり始めたころの話である。当時、最先端をいくと言われていた物流企業の3PL事業の現場で、アルバイトの工数管理について担当者からこんな説明を聞いた。

「ここではアルバイト全員が、作業開始と終了時に、作業内容をコンピュータに入力することにしています。われわれは、その数字を集計してアルバイトの生産性を高めるのに



物流記者時代に見知っていたはずのピッキング作業だったが、見ると実際にやってみるとでは大きく異なっていた。

役立っています」

担当者が「これによって物流ABC(活動基準原価計算)が可能になるのです」と誇らしげに語っていたのを覚えている。

そのころは、具体的なイメージがわからないまま、担当者の言葉をそのまま活字にしていた。その意味が今になって、はつきりとわかった。

このセンターでも毎月、個人のピッキングデータを集約するのだという。このデータからはいつだれが何をピッキングしたのかがわかる。もしピッキングに間違いがあれば、さかのぼって「犯人」を調べることもできる。そして、成績が一定基準に達しないピッカーには指導が行われ、それでも成績が改善しなければ契約

は更新されないのだ。アルバイトが懸命に働くのは、この物流ABCのためだった。

それにしても、物流記者時代、私は果たしてどこまで理解して記事を書いていたのだろうか。今さらながら心もなくなってしまうた。何もアルバイトの工数管理に限ったことではない。毎日、取材に飛び回って記事を書きながら、実際に見たもの、聞いたものがどこまで理解できていたのだろうか。

冒頭で物流記者を辞めた理由として、忙しすぎたことを挙げたが、それと同じくらいに「物流は究めた」という自負があった。もちろん、記者業は聞き書きによって成り立っているもので、そのころ私がやったことに間違いはなかった。いちいち現場の作業を体験してからでないと記事が書けないのでは、新聞や雑誌は作れなくなる。

それでもいかに知ったかぶりを書いてきたことか。「物流を究めた」ところか、ほとんどわかっているか。ふとしたとき、かけから物流センターで働くことになったことで、今後もある自分がどれほどつねほれてきたのかを思い知ることになりそう。

センターの番人、オズ登場

十一月某日。アルバイト三日目。

朝一番にピッキングリストを取りに行くと、複数出荷のシートしかなくて戸惑った。私が習っていたのは単品のピッキングの方法だけだった。単品で注文を受けた場合と、複数の商品の注文とでは領収書や請求書を挟み込む手

順が違うのである。

私が慣れてきた単品出荷のピッキングシートがないかと探していると、背中からトゲのある声か飛んできた。

「ピッキングシートを選んでいると怒られるわよ」

振り返ると四〇年輩のやせぎす女性が立っていた。紫のフリースに黒のパンツ。ひも付きの茶色の革靴をはいていた。流行にはまったく疎い私が見ても、ファッションとは無縁の女性であることがわかる。そのとがったほお骨が映画『オズの魔法使い』にでてくる魔女に似ていた。

彼女は、私の胸についた「アルバイト見習い」のバッジなど目に入らないかのように、まるでカンニング現場を見つけた試験監督のような居高高な口調で切りつけた。しかたなく私は、複数のピッキングシートを手にとって、見よ見まねでピッキングをはじめた。

後になってピッキングシートには「あたり」と「はずれ」があることに気づいた。「あたり」とは、一〇〇個のピッキングが一〇列くらいに集中しているシートや、同じ商品を一〇個、二〇個単位でピッキングするシートなど。「あたり」だけを選べるのなら、ピッキングのタイムはよくなる。そういう意味では、ピッキングシートを選ぶ行為はカンニングにも等しい。

しかしその女性の言葉には、確かにトゲがあったように感じたのだが、思い違いということもある。だれかに見つかることと怒られることを

親切心から教えてくれたのかも知れない。また、私が慣れない環境でナーバスになっていて人の気持ちをやり違えていることだってあり得る。

私はしばらく彼女を観察することにした。最初に気がついたのは、その服装がほとんど変わらないことだった。色は、紫と黒と茶色の三色が基本。というより、それ以外の色を見たことがない。それと、毎日働いている。アルバイトは、各自が申告して休みをとることになっているのだが、彼女が休んだのを見たことがない。

また、狭いピッキングエリアでカートがすれ違っても、彼女が人に道を譲ったことは一度もない。また人が道を譲っても、決して「ありがとう」と口にすることもなければ、目礼さえしたこともない。ただひたすらピッキングに没頭している。彼女の自己中心的な性格は読み違えるのが難しいほどはつきりしていた。

しばらく観察をつづけた結果、先の「怒られるわよ」という言葉には親切心など一片たりとも含まれていなかったと結論づけることにした。それは「だれかに」怒られるわよ」という意味ではなく、「そんなインチキは私が許さないわよ」という意味だったのだ。そう考えると、彼女の発言が無理なく理解できる。そして、私は映画にあやかって彼女を「オズ」と呼ぶことにした。

「オズ」以外にも、物流の底辺を支える人たちは個性派ぞろいである。彼らとのやりとりは、次号に譲りたい。